

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 会誌



# あんこう

第2号

平成21年3月

「あんこう」は、オオサンショウウオの当地方の呼び名です

## 巻 頭 言

オオサンショウウオの調査研究 35 年 (2) .....	1
理事長 栃本 武良	
楽しく協働 .....	3
理 事 門上 保雄	
環境問題と雇用不安から森林に追い風が吹いてきた .....	4
理 事 淵本 稔	
あんこうは昔も今も地域の宝物 (2) .....	6
事務局長 奥藤 修	
第 5 回オオサンショウウオの会 朝来大会を終えて .....	7
事務局員 宮崎 隆史	
“ハンザケ”と呼んでいます .....	8
事務局員 上田 浩	
ある秋の日の出会い! .....	9
事務局員 藤原 進	
オオサンショウウオの地方名と古名 その1、その2 .....	10
副事務局長 池上 優一	
平成 20 年度 日本ハンザキ研究所のイベント報告 その 2 .....	12
事務局員 黒田 哲郎	
編集後記 .....	14
理事 (編集長) 竹村 真澄	

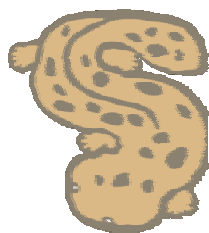
## 巻 頭 言

特定非営利活動法人という長い肩書きの付いた組織になって、最初の年度が終了します。この1年は、馴れない事務手続きで会員の皆様方には色々とお迷惑をおかけしたと思いますが、何か問題点がありましたら遠慮なく事務局宛にご連絡ください。お知らせいただければ、反省と共に繰り返してのミスが出ないように努力し、少しずつでもよりよい方向へ進めて行きたいと思っています。

この1年間には、色々な出来事がありました。イベントの方はほぼ順調に実施できましたが、天候との関係で中止せざるを得なかった事もありました。準備の方も泥縄的にバタバタした事もありましたが、参加された会員や会員以外の皆様にも大方の所満足していただけたと考えています。ハンザキをはじめモリアオガエルの観察会も夜間と言う条件の悪さがありますが、近くに民宿などもありますので遠方からの参加も可能です。一度見てみないと分かりにくいと思いますが、夜間のハンザキの活発さは、昼間の動きの無い生き物と同一の種とは思えないくらいです。また、この他にもご希望が多ければ、ホテルの観察会や植物・鳥類ウォッチングなど講師陣をそろえて、事業を増やして行きたいと考えています。

会員の皆様方へは、基本的に事務局からの一方通行的な連絡になりがちですので、イベントへの積極的な参加、“あんこう”や“ハンザキ研ニュース”などへの感想文や投稿もお願いしたいと考えています。研究所の研究者として登録しているメンバーには、年間を通して何回かはハンザキ研ニュースへの投稿を義務付けているのですが、なかなか入稿しません。別にハンザキに関する事だけではなくて、何でも自然環境に関する事柄であればいいのですから、会員の皆様もふるって投稿してください。

今年の5月に新年度の総会が予定されていますが、そのような機会にも出来るだけ多くの方のご意見を伺いたいと思いますし、ご発言も期待しておりますので、ふるってご参加ください。事務局員も初めての事ばかりで準備に追われているところですが、総会ではきちんとした報告が出来ればと思います。



平成21年3月31日

NPO 法人 日本ハンザキ研究所

理事長 栃本 武良

## オオサンショウウオの調査研究

35年(2)

理事長 栃本 武良

調査を始めるにいたるまでの準備について

### 宿泊先は？

昭和50年に調査を始めた頃は、河原にテントを張っての自炊で人数も多く楽しいキャンプ気分でしたが、冬はテントのグランドシートに河原の石が凍り付くと言う厳しさでした。近くに山小屋を持っていた方が見かねて使っていない時にはとって、1年ほど借用しました。その後、生野町の休暇村“魚ヶ滝荘”が営業を始めてからは、夜中に調査を終えた後に入浴できると言う天国のような待遇になったのです。代々の所長さんには色々とお世話になりましたし、時にはマツタケを見つけたと言って差し入れを頂いたこともありました。職員の皆さんが総出で山菜を採取しに出かけていたこともあり、タクアンも自家製で漬けて入っている様子も拝見しました。あれから35年が過ぎ、今ではほとんど閉店状態なのは淋しい限りです。事前に予約を入れておけば営業するようですが、ゴールデンウィークや夏休みには満員の盛況を呈しているのを見ると、もう少し工夫すれば何とかかなりそうに思えるのですが・・・。

ハンザキの繁殖シーズンの8～9月には、観察用の人工巣穴が4基設置されている簾野地区の調査に重点を置いて調査をします。ここでは民宿こうちゃんのお母さんに長年お世話になっています。離れに宿泊するのですが、夜中にゴソゴソと出入りして静かな村の夜を騒がせ安眠妨害をしてしまいます。その上、怪しい装備の人間がウロウロするので、それぞれの家に飼育されている犬が送り狼のように順番に吠え立てるので、申し訳ないことでした。この宿では、地産材のおかずがお母さんの工夫の手料理で出てくるのが楽しみでした。皆さんは“土手のスカンボ”ことイタドリの料理を食べたことがありますか？子供の頃には学校帰りに折り取った茎の皮を

剥いてその酸っぱさに顔をしかめつつ味わったことがあります。酢味噌和えはなかなかおいしい料理です。これにカラシをたっぷり練りこんで酒の肴にします。最近の傑作は、当ニュースNo.30で紹介した“こうちゃんうどん”です。皆さんも是非試食してみてください。

テント・山小屋・ホテル？・民宿そして現在のハンザキ研究所住み込み調査という歴史です。最も川の横に宿があっても、最近はずっかり夜間調査をサボっています。こんなに便利な地の利を得た場所にいながら、夜の川に入らないで1年が過ぎました。夜間の川の中での調査で、バランス感覚の低下したことを切実に感じているのが最大の原因ですが、無理の無い範囲での調査を今年は再開するつもりです。もっとも、昼間に多くのことをやりたい、あれもこれもと欲張って動くことで体力を消耗させていることもあります。なんだかんだと雑用が増えてきたこともあって、少々焦り気味です。そんな毎日ですが、ハンザキ橋からアンコ淵の黒主の観察と、モニターによるチェックは作業の合間に続けています。それと、カニ籠トラップ調査の効率のいいことと昼間の調査で楽が出来ることで、どうもダンドン横着になってきているようです。



写真 カニカゴに入ったハンザキ

### 照明の話

夜間の調査では明かりが必需品です。最初は普通の懐中電灯でしたが、照らす範囲が狭いので駄目でした。カーバイド・ランプは近



い範囲を広く照らしてくれる上に、冬には濡れて冷たくなった軍手でその傘に押し付けて指を暖めることが出来て良かった。しかし、原石が反応しつくと入れ替えをしなくてはなりません。重たい石ころを予備に担いでの調査行も負担になりますし、捨てたカスが次の調査の時に目に付くこともあり気になりました。石灰だからいいだろうと言う意見もあったのですが、出てくるガスは毒ガスですし鼻の中が真っ黒になるくらい細長い煤が大量に出てきて、吸い込んでしまい胸がムカムカしてきます。河原での入れ替え作業中にガス爆発させてしまったことがありました。ゴムパッキンに砂がついてガス漏れを起こしていた所へ火をつけようとしてタンクのガスにも引火したのです。皆さんは“しし脅し”をご存知でしょうか？ カーバイドを使ったイノシシ追い払い道具で、広い畑や田んぼでも大きな音を出しています。それが目の前で爆発したのですから鼓膜が破れたかと思っただけでした。こんなこともあってのことですが、調査後のビールの味が悪くなるのが最大の理由でやめました。



写真 カーバイド・ランプと集魚灯(左)

その後は？百メートル先も照らせるという強力ライトも使いましたが、そんなに遠くは見ることができないので、やはり広い範囲を照らすライトがほしい所です。滑って転んでライトを水没させることもありますので、潜水用の水中ライトなども使いましたが、あまりいいものはありませんでした。釣り道具店で売られている集魚用のガスランプを使って

いると言う人の話で試しました。カーバイド・ランプのように近くを広く明るく照らしてくれるので、便利でしたが、2時間しか使えないので、予備のカセットボンベを4~5本持っていかなければならずかさばってしまいます。現在はLEDライトを使っていますが、明るく長い寿命でいいのですが照らす範囲が狭いのが欠点です。

### 長靴の話



写真 ゴム長にすべり止めのワラジをつけて

夏の調査だけなら濡れてもいいのですが、他のシーズンではやはり防水しないと寒くて駄目です。当初は、胸まである分厚いゴム製の重たい長靴でした。ゴム底なので滑りやすい欠点があり、縄を巻きつけたり登山用の麻のわらじを縛り付けたりと苦労しました。足底にフェルトを貼り付けたこともありましたが、途中で剥がれたりすると悲劇が起こります。今では、薄い合羽地の釣り人用の“ウエダー”を使っていますが、イバラの棘に引っかかったり膝つきで作業する時に尖った石で孔が開いて水漏れしやすいのが欠点です。しかし、軽くて足裏に滑り止めのフェルトが付いているので便利です。また、冬には潜水用のウエットスーツ地のもは暖かく助かりますが、着脱に苦労しています。スーツの上から着て潜水できる“ドライ・スーツ”を試していたメンバーは、汗だくになり駄目を出していました。真冬でも、川の中を歩くと汗が出てくるのですから密閉した潜水服は無理でしょう。初めての人は寒さ対策を入念にして来

ますが、測定などで止まっていると汗が冷えてきて風を引いてしまいます。合羽の上着を持っていくのが雨よけ・風よけに便利です。

### 背負子(しょいこ)の話

調査用具は色々あって、これを一まとめにして携帯するには中型のリュックを使っていますが、中から必要なものを取り出すのに困ります。現在は、背負子にプラスチックの籠を縛り付けて使っています。中を仕切ってそれぞれの道具を収めるスペースを作っておくと出し入れも簡単に出来ます。

### 調査用具の話

最低限の用具としては、採捕用の手網と全長測定器、体重測定用の秤、カメラ、記録道具です。個体識別の手段として、タグから写真による斑紋の記録、そして永久標識としてのマイクロチップに変わっていきました。

- 1) 網は大型のハンザキも入るような大きさのもので、少々深い場所でも使えることと杖代わりになる柄の長さを工夫しました。支流の谷川などでは兩岸からの木の枝に網が引っかかりますので、柄の長さを短くできるように工夫しました。
- 2) 全長を測定するために、当初は力づくで押さえ込み大型のノギスで測定しました。しかし、短時間の再捕での誤差の大きさに問題がありました。それは、抑えるとハンザキが力んで体を硬くし小さい値が出てしまうことで、2~3cmの誤差がありました。考えて、雨樋用のエンビを使って測定器を作りました。一方からハンザキを歩かせて鼻先がストッパーにぶつかった時の尾端を押さえて数値を読み取ることを数回繰り返すのです。雨樋の底にはメモリを付けてあり、関節のルーズなハンザキの測定には効果的でした。幼生や小型個体の場合にもそれぞれ工夫して測定器を考えました。透明なエンビのパイプにメモリを付けておき、その中に個体を入れて測定します。
- 3) 体重は大きな秤を持ち歩くわけには行きませんので、携帯が楽なバネバカリを4種使っています。それぞれ有効範囲がありますの

で1~10kgの範囲で重なるような組み合わせでそろえます。昔懐かしい棹秤も使いましたが、おとなしくしてくれないハンザキには無理でした。

4) カメラの歴史には色々ありました。ハンザキの体の特徴(指の欠損や斑紋)を撮影することも当然ですが、当初の個体識別法として使用した各種のタグの装着状態の記録がメインでした。標識を付けることができるのは尾部背縁しかないので、尾部の左側面を撮影していました。タグの装着時間が短いことと大きな傷跡を残してしまうことでやめた後は、尾部左側面の斑紋の照合による識別法を長い間採用しました。ただし、指紋の様に不変なものではないので、長期間の再捕がないと途切れてしまいます。10年前ほどからマイクロチップの使用が可能になり、個体識別の効率がアップしました。

カメラは、一眼レフの重たいものにストロボを付けて使っていましたが、水没させたり雨で濡れてショートして発光しなくなったりと苦労の連続でした。そこへ、“濡れてもピカソ”と言われた小型でストロボ内蔵の防水型カメラが出現し、重宝しました。コンパクトな水中カメラとして有名な“ニコノス”も使いましたが、接写も必要な調査には不向きでした。ニコノスI型は高く売れるとの噂があるので売却をしようかどうか迷っています。本当かな? (続く)



### 楽しく協働

理事 門上保雄

協働って、共同の間違いじゃないのと思われた方も多いのではないのでしょうか。「参画と協働」という形で、10年ぐらい前からよく見かけるようになりました。当初は行政が地域住民に向けて、地域活動への参加を呼びかけるためのキャッチフレーズとして使われていたように思います。でも、「協働」の本当の意味を分かっていなかったのも行政サイドだったのではないのでしょうか。では「協働」とは

どんな概念でしょうか。

協働とは、複数の主体が何らかの目標を共有し、ともに力を合わせて活動することと言えます。元は英語のコプロダクション Coproduction という造語 (co+production) で、これが協働と訳されたことで、日本語として定着しました。最近では、同義語としてコラボレーション (collaboration)、パートナーシップ (partnership) などの単語も協働の意味でよく使われています。しかし言葉の意味が分かっても、まだ「楽しく」ということにはなりません。どうなれば「楽しさ」が生まれるのでしょうか。それにはまず、協働の精神、原則を理解していただかなければなりません。

協働の精神とは、「立場の違う人達が、自主的に、対等の関係で、互いを尊重しあいながら、共通の目的を達成するため、問題解決に向けて協力すること」なのです。言葉で表現することは簡単なのですが、実際の活動となるとなかなか上手く行かないのです。

ところで、「ワークショップ」という言葉をお聞きになったことはありますか。私の属する他の NPO 法人でも、むらづくりの初段階としてワークショップ形式による話し合いをします。ワークショップとは、参加者数人が 1 つのテーブルを囲んで、一つのテーマについて意見を出し合い、テーマに向けての問題解決やその方向性を決めていくことです。本当に様々な意見が出されます。時には、同じテーマに対する意見であるのに、全く正反対の意見が出されることも少なくないです。これでは意見がまとまらないわけですが、テーブルにはテーブルリーダーという人物がいて、様々な意見をグルーピングしながら絞って行きます。ワークショップ参加者は、その過程を見ながら、さらに意見を出して、最終的に皆が納得できる 1 つの方向性が導き出されず。ここで重要なことは、参加者全員が納得できたかどうかなのです。

話を「楽しく協働」に戻しましょう。協働の精神の骨格となる「自主的、対等の関係、互いを尊重、共通の目的、協力」について、

皆さんが地域活動を行なう時、本当に同じ目的を共有しているでしょうか、相手を尊重し相手の目線・立場で物事を見ることが出来ているでしょうか。これが出来ていれば楽しい話が出るのですが。そこで、先ほどのワークショップにおけるテーブルリーダーの役割をなす人が必要となります。地域活動などではこうした役割を担う人をコーディネーターと言います。

コーディネーターは、協働の参加者の意見・ニーズを聞きながら、中立な立場で、協働の精神に基づき、参加者が共通の目標を共有できるように働きかけるとともに、相互に互いの不足を補い合い、ともに協力して問題解決に向けた取り組みへと誘導していくわけです。これを補完性の原則と言いますが、これが出来ると楽しくなってくるのです。

一人で全てのことが出来る人間などいないわけですから、協働の参加者は必ず誰かを補完できるわけで、そのことによって自身の存在、プライドを感じる事ができ、一方、補完された人は感謝、喜びを感じられるようになります。絵に描いた餅のように思われるかもしれませんが、現実に何度も見、体験してきました。

最後に、協働にボスはいらぬのです。ましてやコーディネーターは決して、絶対に、ボスではないのです。全員が対等なのです。全員が補完の原則の中にいるのです。是非、皆さんに「楽しく協働」していただきたい、そして私もそこに参加したいと切に願っています。



## 環境問題と雇用不安から森林に追い風が吹いてきた

理事 澁本 稔

海外産の安い木材におされて国内産の木材が壊滅的打撃を受け、森林の手入れがおろそかになって久しく、その結果、本来森林の持っている保水力が失われ、雨が降るとすぐに河川が増水し濁った水が流れています。



日本の森林は生命力を失い、国土が崩壊していくのかと心配していましたが、ここへきて森林の蘇生に追い風が吹いてきました。京都議定書によって国際公約となった日本のCO<sub>2</sub>削減の取り組みや、アメリカ発世界同時経済不況による雇用不安が、改めて森林を注目させることになりました。

### 1 環境対策として

地球温暖化防止のため、京都議定書において日本は2012年までにCO<sub>2</sub>を1990年比で6%削減することが国際公約となりました。そのうち、森林の吸収量を3.9%とする目標で、間伐など手入れされていることが条件となります。

しかし現状は、木材の自給率は約20%で、林業の就業者は1965年に比べ5分の1、5万人を切るまでになりました。森林は長い間、間伐さえも行われず、森林の中に陽光が届かなくなり、暗くなって下草も育たず、樹木は根や幹を十分に発達させることができなくなりました。その結果、雨が降れば表面の土が流出してしまうのです。

今年1月、林野庁は「緑の社会資本」として、森林づくりや木材利用を進めるための国民運動の展開、化石資源に替わるエネルギー等としてクリーンな森林資源の利用拡大等を柱とする森林づくりを進めると提起しました。

すでに、間伐促進のための団地化・機械化促進、緑の公共事業フォレストアクションプラン、森林セラピスト・森林セラピーガイド、緑のボランティア活動をはじめ具体的な施策が次々と取り組まれています。

### 2 木質ペレットなどのストーブ導入について

森林面積が84%を占める朝来市においては、間伐などの手入れをしながら山を蘇らせることが地域の経済に好影響をもたらし、地球温暖化防止にも貢献することになります。

そのためには間伐材を有効に活用しなければなりません。山の手入れをするという入り口から始まり、その結果、生まれてきた間伐材などの有効な消費という出口を考えなければ

なりません。まずは市役所など公共施設の暖房に、間伐材やおがくずを利用するペレット燃料などのストーブを導入することから取り組むべきと考えます。

すでに豊岡市では実践され、燃料代が従来の灯油ストーブの半額になったという効果があがっています。間伐材などを利用するペレット燃料は、公共施設への利用だけでなく例えば事業所の熱源、農業用ハウスや温泉施設の発熱への利用も研究されており、これらを自治体の実情にあわせて研究する場合、経済産業省から十割補助の調査費が交付されますから、朝来市においても有効活用すべです。

### 3 森林整備で収入源に

森林整備が進めば、CO<sub>2</sub>吸収量を排出権取引市場で売却することによって、森林が収入源になる可能性があります。すでに北海道の下川町では具体的計画に入り、また高知県・大阪府・京都府なども取り組みを始めました。

いずれ政府から、自治体も事業所と見なされ、CO<sub>2</sub>削減の具体的な数値が突きつけられます。それを見越して朝来市の森林整備を促進し、削減目標の数値を超えて余った排出削減量を証券化して企業などに販売できれば、森林が新たな財源を生み出すこととなります。早急に調査研究することが大切です。

兵庫県森林組合連合会は、森林がCO<sub>2</sub>を吸収する能力や価値を算定して証明証を発行し、企業などに社会貢献活動の一環として購入してもらおう「カーボンオフセット」のビジネスモデルづくりに取り組んでいます。その売上金を、森林整備にまわす計画です。

森林に囲まれた黒川地区は、従来はマイナスイメージに捉えられがちでした。しかし近年、価値観が大きく転換しており、地球規模で自然環境保全に取り組み、経済対策や雇用とも結びつけられています。森林に追い風が吹いてきたのです。



## あんこうは昔も今も地域の宝物 (2)

事務局長 奥藤 修

急激な金融不安に抛る経済危機の中、大変不安の大きい2009年幕開けとなりました。生野町には、世界トップの業績を争う企業を始めとして上場企業が5社もあります。下期の世界的な業績悪化は当地域においても大変深刻な問題を及ぼしそうです。

幸いにも、日本ハンザキ研究所は上期の比較的順調な経済状況の中で発足いたしました。地元住民や関係者諸氏の尽力のおかげを持ちまして、初期計画通り順調な新春を迎える事が出来ましたことを、事務局一同、心からお礼を申し上げます。本年は、大変厳しい社会情勢の中での2年目で、安定と成長を問われる年となりますが、200余名の会員の力をお借りして、事務局員一同力を合わせ、レベルアップした活動が提供できるように頑張りたいと思います。

元気なうちにと勤め先をやめて、溪流のヤマメ、岩魚、鮎釣り三昧の生活を始めて、早、丸4年が過ぎました。夏には、主に鮎を求めて近隣の川に毎日のように通い、釣上げた獲物は燻製などにして食し、又、秋以降は、銀山湖のマス、アマゴや管理釣り場のアマゴなどを対象に釣りを楽しんでおります。

この地域には、昔から「ひらべ」(アマゴ)と呼ばれる溪流魚が山奥の渓流域にたくさん棲息しており、臆病で俊敏な性格から釣りづらく、多くの釣り人をとりこにしてみました。近年は、遊魚用の養殖アマゴや岩魚、ブラウントラウトなどの放流により、交雑も進み、原種は人気のない山奥のきわめて限られた場所にしか棲息していません。しかし、その場所も人工林に覆われ日差しのない川となりつつあり、餌となる水棲生物や昆虫が棲息しないために「ひらべ」はこの地でも大変貴重な幻の魚となっています。

10月21日、NPO法人日本ハンザキ研究所会員へのハンザキ研ニュース配信準備に研究所を訪れたとき、栃本理事長から研究所通用門前のハンザキ橋〔正式名は平和橋〕上流

でアマゴの産卵行動の形跡が川底にはっきりと見えるとの話を聞きました。昼食後に事務局員のメンバーと共に橋の上から川を覗いて見ると、瀬肩のやや緩やかになった流れの下に、磨き上げられた小石の固まりが産卵後の形跡をあらわにし、また、周辺には数匹のアマゴが群れをなし産卵行動を行っています。メンバーの一人は、鮎の産卵調査を行った経験から、あの下にはきっとアマゴの卵が数百の卵塊としてあるはずだと興奮気味に語った。私自身は、上流部の渓谷に入ると時折見かける産卵の光景なのですが、本流でのたくさんの魚による産卵行動は大変珍しい体験です。渓谷では大概一つがいのオスとメスによる産卵が通常の光景で、今回のように、この河川の本流域で沢山の魚が集まって産卵をする光景を見るのは初めてでした。栃本先生によると前日には20数匹が群れをなして行動していたとのことで、普段見かけない30センチを超える沢山の魚がどこに潜んでいて、今回の産卵に及んだのかと大変不思議に思いました。

昨年からの川の生物の生息状況の調査や環境学習のために、市川生野漁業組合の協力を得て、学校敷地に隣接する河川部分を禁猟区として管理していただいております。早速その成果が出たのか、との思いを巡らしました。来春には“あんこう淵”の周りをアマゴの稚魚が群遊している姿を想像すると思わず頬の筋肉が緩んでしまいます。

後で聞くと、事務局員メンバーの一人である黒川養魚場の主人がそっと産卵前の成魚を放流したそうです。

近年、この地域の魚種が大変少なくなっているという地域の人はいっています。どのような理由なのかは解りませんが大変気になるところです。今後、保護されたこの場所での調査活動によって、原因が少しずつ見えてくるかもしれませんし、いろいろな魚が増えて発見されるケースがあることを期待しています。

昔の地域のことわざに、「黒川三里岩一つ」の言葉があります。この地域の地層は岩盤で形成されていて、川も“なめら川”(岩盤)と称されています。この川で生まれた魚はと



ても美味で、特に、良質の藻を食み、砂を内臓に持たない銀山湖上流の鮎は、形は小さめですがその味には定評があり、古くから地元を始め、京阪神からの数多くの釣りファンに愛されてきました。しかし、近年は冷水病なる病気の出現で釣り客もめっきり減り、鮎釣り盛期の川原は、清涼を求めにきた川遊びの親子連れの家族や若者に占領され、釣り人はひっそりと人気のないところで竿を出しています。

1972年に県営の多目的ダムとして完成した生野ダムの銀山湖は、生野町の観光施設として遊覧や遊魚釣り場として、わかさぎ、鯉、草魚、鮎、マス、岩魚、アマゴなど数多くの魚が放流されて親しまれてきました。また、急速に繁殖した外来魚であるブラックバス釣りのルアーフィッシングフィールドとして関西地域のマニアのメッカとなっています。

しかし、直下の奥銀谷、口銀谷地域にとっては、ヘドロと低水温の水を排出して、河川環境を劣化させ、従来いた川の生物が日増しに減少し続ける大変迷惑な一面をも持っています。ところが、昨年、今年と銀山湖に大量の鮎が自生し遡上する兆しが見えてきました。上流の河川に、放流された鮎が産卵孵化して銀山湖産鮎として遡上を始めたのです。その数は、魚ヶ滝上流に遊魚用として放流された鮎をしのぐかと思われる数量で、天然鮎の特徴である体高と、釣り客が求める独特の強烈な攻撃力を持っています。

市川源流域の河川は、少水量、低水温のため、温度変化に敏感な鮎の棲む環境としては大変厳しい川です、しかし、同じ環境で孵化して遡上する鮎には抵抗力があり、他川の例から見ても、冷水病などの病気にも大変強いと考えられます。河川全域に銀山湖産鮎が遡上し銀鱗を躍らせ苔を食む光景が見られるように成れば、昔のように、多くの釣り客で賑わう川が蘇ると思います。そのためには、銀山湖産鮎を保護し上流域まで遡上させる早急な対策が必要です。地域に出現した産物を新たな宝物として、地域をあげて守れるように取り組みたいものです。

又、釣り好きの一ファンからの漁業組合へのお願いとして、適切な産卵保護区を早急に設けていただき、銀山湖産鮎のブランド化を果たして頂きますようお願いいたします。



## 第5回オオサンショウウオの会 朝来大会を終えて

事務局員 宮崎 隆史

平成20年10月4日から5日にかけて、栃本武良理事長が30年以上に渡って調査研究を続けてこられ、「オオサンショウウオの会」開催のきっかけとなったゆかりの地でもある朝来市生野町において、第5回大会を開催しました。

平成17年の秋に、当時副会長だった栃本会長より平成19年の朝来大会開催に向け打診がありましたが、生野銀山湖開坑1200年事業と重なってしまうためにどうしても事務局業務を行う見込みがたたず、平成20年に大会開催を受け入れることになりました。



写真 栃本会長のオープニング基調講演

準備段階から関わって頂いたNPO法人日本ハンザキ研究所や実行委員会の皆様をはじめと、多くの関係者やボランティアスタッフの皆様の献身的なご努力に対しまして、あらためて深く感謝申し上げます。

大会1日目は、一般市民などを参加対象として「オオサンショウウオを生かした地域の活動」というテーマのもとにシンポジウムを開催し、会員などによる総会・報告会参加者も含めると約150名という多くの参加者を得て、

盛大に開催することができました。

報告会では、全国各地の研究者などから13の興味深い報告が行われ、今後の調査研究に大いに役立ったことと思います。また、この全国大会を契機として地域の自然環境保全や地域活性化などを旨とする「いくのあんこうプロジェクト」を市民グループによって立ち上げて頂いたほか、大会の様子などが新聞テレビ各社に取り上げられるなど、情報発信としても多くの成果を得ることができました。



写真 会場ロビーのグッズ販売

さらに、大会2日目には、NPO法人日本ハンザキ研究所・黒川あんこうミュージアムとして地元と一緒に手づくりで開設された様々な施設や、自然にやさしい河川工事方法の先進事例などを見学して頂きました。

振り返ってみると、組織体制や見学施設の整備などがある程度整った段階で開催できたので、平成20年度の開催は結果オーライだったのかなと思っています。



写真 二日目の現地視察はハン研スタート

さて、オオサンショウウオを取り巻く状況は依然として厳しく、地球温暖化などに伴う自然環境の崩壊、ツボカビ症の蔓延やチュウゴクオオサンショウウオによる遺伝子汚染など、私たち関係者はこれらの対策に向けてさらに努力を続けなければなりません。

今後もこの大会をステップとして、日本ハンザキ研究所をはじめとする関係者の皆様により一層情報共有の度合いを増していくとともに、息の長い調査研究活動が展開されていくことを願ってやみません。



## “ハンザケ”と呼んでいます

事務局員 上田 浩

私の田舎は、安芸高田市で広島県と島根県境にある地域で、オオサンショウウオのことをハンザケと呼んでいます。小学校の頃から夏休みはチョン掛けという漁法で鮎をよく取りに行っていました。

潜っている時、時々見かけていましたが、サイズは60cm位のもが多かったと思います。水中で追いかけていた鮎が石の間に隠れるとアッという間にくわえられるのを見たこともあります。失敗することもよくありました。じっと待っていることが多いようで、動いている生物を食べるのではないようで、エサになる生物は色々あると思います。60cmになるのは何年位かかるのだろうかと思っていました。

静かに触るとわりにおとなしいことや、いたずらをすると臭いのある粘液を出すことも知っていましたし、特別天然記念物に指定されているのも知っていました。

そんな知識の中で黒川に住んで20年が過ぎましたがハンザケが昼間でも見られること、大きさが60~90cmあり、また数の多さや卵を見た時はビックリしました。

それと文化財保護法に守られていることを知りました。それだけ黒川地域の自然環境が

適しているのだと思います。しかしその環境が少しずつ変化してきていますが、今よりも悪くならないように人間の都合ばかり考えないように行動しなければならないと思います。

黒川地域の豊かな自然の中、ハンザケの大きさ、アマゴの朱点の色。カワセミの青色のあざやかさ、その他の生物をいつまでものんびりと眺めることができれば、続いたらいいと思いませんか。



写真 松井理事、筆者、栃本理事長



## ある秋の日の出会い！

事務局員 藤原 進

生野かいわ倶楽部の1サークルが、毎年秋に「市川の大掃除」と題して、ごみ等を回収しています。

場所は、盛明橋から真弓橋の約1km間を、回収袋や回収具をそれぞれの手に持ち、川の隅から隅まで宝探しをするような感じでごみを拾っています。

去年は、10月26日(日)に行いました。少し肌寒く川の中に入るにはチョット気が引ける気候でしたが、会員の皆さんとハンザキ研究所の会員の方々や事業に賛同して頂いた市民の皆さんとで、最後まで頑張って清掃をすることが出来ました。

川の浅い所ばかりではなく、当然深い所にもゴミが沈んでいたりします。何人かは胸まで長靴を履き、深みに入るのですが、昨

年は始めて長靴を履いて作業をしてみました。深みに入ると水の圧力で「ギュー」と締め付けられ、そのまま倒れたらとんでもないことになるなと思いながら、今まで参加した中では一番の緊張感を持っての作業でした。

私が盛明橋のたもとから市川に入り、50m程ゴミ拾いをしていたら、土木工事で使うセメントや砂利・砂を滑らせて工事場所に落とす「シューター」が浅瀬に伏せた格好で沈んでいました。

両手が塞がっていたので、何気なく足で「シューター」をひっくり返そうとしたのですが、ゴミがくっついており、なかなかひっくり返りません。

仕方なく両手に持っていたゴミ袋や道具を草むらに置き、「シューター」の片方を持ち持ち上げました。

持ち上げると汚泥がもくもくと湧き上がり、一帯が濁ってしまいどれがゴミなのかが判別出来なくなってしまいました。しばらくすると濁りも収まり、「シューター」に引っかかっていたゴミが解るようになり、回収をしようとした瞬間、何か黒い大きな物体が川上に向かって動き始めました。

手をその大きな黒い物体の前に差し出してからのものでしたので、ドキッとして咄嗟に手を引いたのは言うまでも無いことですが、正体が判らない分一層の恐怖が込み上げて来ました。

一歩二歩後ずさりをしてよ〜く見ると、なんと「アンコウ」でした。

作業をしていた参加者に「お〜い」「チョットおいで」って大声で呼ぶと、3~4人が駆けつけてきました。駆けつけた人は口々に「あっ！アンコウや」「サンショウウオや！」って大騒ぎ。「ハンザキ研究所」の会員の方が疾風の如く何処かに行ったと思ったら、体長測定器を持ってきました。

測るとなんと80cmをチョット超えた大物でした。良く太っており食べ物も豊富にあるのか伺える様子でした。

500m下流には堰があり、そこにも大きな「アンコウ」が居るのを知っていますが、目



と鼻の先の真近で見るのは最近無かったことなので、非常に興奮しました。

いい感じで寝ていただろうにと思いながら「シューター」をひっくり返したことに罪悪感を覚えたりもしました。あの時の「アンコウ」は今どうしているのでしょうか？もっと良い居場所を探したのでしょうか？チョット気になっています。



写真 河川清掃中に出現した、アンコウ君

今年も秋に「市川の大掃除」を計画しています。また、会ってみたい気がしていますが、変な場所で寝ないでほしいなって思う今日この頃です。



## オオサンショウウオの古名と地方名

### その1. 「あんこう」と「ハンザキ」

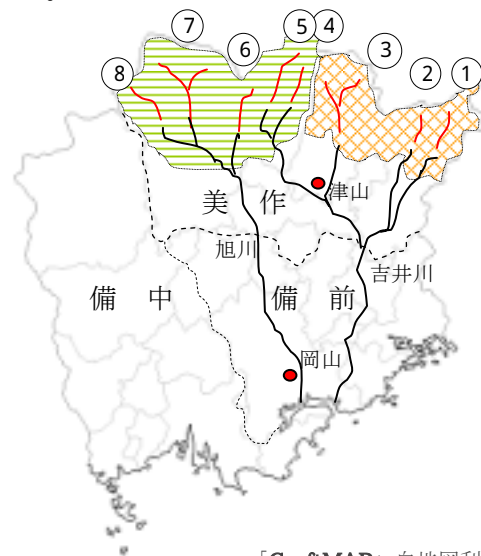
副事務局長 池上 優一

岡山県西栗倉村の「ハダカス」という地方名については、津山藩の命により編集された「東作誌」(文化12年 西暦1815年 p154)に次のように書かれています。『此岩の辺に景清が放しき云うハダカスあり。長さ三間余と云う。先年洪水にて川下へ流れ出るもの一間余許ありきと見たる人の話なり。ハダカスは吉野郡方言なり。一名鮫鯨という(校訂者云。鮫鯨と山椒魚は別物なり)。本名山椒魚(肉サンショウの香あるを以ってなり)。津府の人はハンザキと云う。渾て此邑景清に因める事多し。』(「東作誌」p154 文化12年 西暦1815

年より)

この東作誌の中の「一名鮫鯨(アンコウ)という」、「津府の人はハンザキと云う」という文が私の頭の片隅でずっと引っ掛かっています。オオサンショウウオの多産地である市川上流の朝来市生野町黒川では、普通に「あんこう」と言っており、岡山県の真庭市湯原町では「ハンザキ」と言っています。岡山県の美作(作州)の津山に近い町で育った私は、近くの川で見た記憶は無く、飼われているのを何度か見たことはありました。ハンザキとかあんこうという呼び名は全く知りませんでした。環境調査の仕事に関わるようになってから、まず、湯原町でハンザキと呼んでいるということ、半分に裂いても生きているからそのように呼ぶという話を聞きました。また、数年前に生野の日本ハンザキ研究所の支援を始めてから、あんこうと呼ぶことを知りました。その後「ハダカス」という呼び名に出会ったことから、栃本所長に監修をお願いして、オオサンショウウオの古代名と地方名について、文献や資料を調べた結果を一旦まとめました。

平成20年夏、美作地方の夏祭りの新聞広告で、勝田「あんこう祭り」の見出しを見た時、「え、岡山でもあんこうなのか」と衝撃を受けました。即、聞き取り調査を行いました。



「CraftMAP」白地図利用

図 地方名調査を行った岡山県美作の河川



その結果、①一級河川吉井川一次支川吉野川上流（西粟倉村）ハダカス、一部アンコ、②同一次支川吉野川二次支川梶並川上流（美作市勝田町梶並）あんこう、一部ハンザキ、ハダカス、③同一次支川加茂川上流（津山市加茂町）、あんこう、一部ハンザキ、④同一次支川香々美川上流、ハンザキ、一部あんこう、⑤吉井川最上流（鏡野町奥津）ハンザキ、⑥一級河川旭川一次支川目木川（真庭市久世町）ハンザキ(ケ)、⑦旭川上流域（真庭市湯原町他）ハンザキ(ケ)、⑧同一次支川新庄川（真庭市新庄村）ハンザキという状況でした。図に示すようにあんこう域（ハダカス域を含む）とハンザキ域にほぼ分かれることが判明しました。

実は、この境界は、東作州と西作州の地誌の編纂区域の境界にも一致しています。比較的混交が少なく残っている地方名の存在理由については、現在考察中です。なお、図中の河川上流部の赤い線が第二回自然環境保全基礎調査でのオオサンショウウオ生息確認域です。また、聞き取り調査結果を基に、斜線格子部分—アンコウ域、横線部分—ハンザキ(ケ)域を区分けしてみました。

## その2. 古名「ハシカミイオ」について

### 1. 本題に入る前の時代背景の把握

文字を持たない我が国へ中国語の漢字が伝来し始めたのは、紀元一世紀頃とされている。その後、中国の文化の伝来とともに漢字も頻繁に伝わり、ほぼ受け入れられたのは「古事記」や「日本書紀」によると三世紀から四世紀にかけてであるとされる。その頃に中国からの書物「論語」や「千字文」が伝来したらしい。

漢字が表意文字であったことも幸いしたものの、帰化人や先人たちの並々ならぬ努力と苦労を経て、漢字と我が国の言葉—やまと言葉（文字は無い）との対比（翻訳のようなもの）が進み、我が国の言葉として、漢字を用いた文を書けるようになった。それが、奈良時代の古事記や日本書紀である。

しかしながら、書物の漢字を辿っていくと意味はわかるが、音読ができないという現象が当然の如く生じたわけであるが、この解決方法として、漢字の音のみを活かして（意味を無視）、一字一音でやまと言葉を表記するという漢字使用法が生まれた。これが、万葉仮名である。このように日本人が漢字を用いて、やまと言葉を文章（漢式和文）にできるようになったのは、大化の改新以降とされている。

その後、「万葉仮名」から「カタカナ」が出来上がるのが十世紀半ば、そして「ひらがな」へと変遷していった。こうして平安時代には、カタカナ、ひらがなという日本の文字が生み出され、漢文体、漢式和文体、宣命体、漢字カタカナ交じり文体、ひらがな文体などで表記されていた。

### 2. 古記録のオオサンショウウオらしき表現

オオサンショウウオのことを述べているであろう古文書として、多く引用される古典書籍とその記述文を示すと、次の通りである。

- ① 720年完成『日本書紀』卷二十二 《推古天皇二七年（六一九）四月壬寅【四】》「二十七年夏四月己亥朔壬寅。近江国言。於蒲生河有物。其形如人。」《推古天皇二七年（六一九）七月》「秋七月。撰津国有漁父。沈罟於堀江。有物入罟。其形如兒。非魚非人。不知所名。」
- ② 840年完成『日本後紀』卷六 逸文卷首 日本後紀 卷六起 延暦十六年（797）八月 「己巳、掖庭溝中獲魚、長尺六寸、形異常魚、或云椒魚、在深山沢中、」
- ③ 879年完成『文徳実録』卷四 仁寿二年（852）3月「癸酉、近江國得レ魚、形似ニ獺猴一、異而獻レ之、故老皆云、此椒魚也、昔時見レ有ニ此物一、」
- ④ 平安末期『日本紀略』にも、『日本後紀』と同様の記載がある。
- ⑤ 918 本草和名「鰻鱺魚、鱸、鮠魚 和名一波之加美以乎」
- ⑥ 931 和名類聚抄「鰻鱺魚、本草云鰻鱺、和名波之加美以乎」
- ⑦ 1100頃 類聚名義抄「鰻鱺、鰻鱺魚、波之加美以乎」
- ⑧ 1150頃 伊呂波字類抄「鰻鱺魚一本草云鰻

鱺、和名波之加美以乎」「鯢魚ーハシカミイヲ見本草」

⑨1694 和爾雅「鯢魚ーサンセウウヲ」「鰻鱺魚ーウナギ」

### ③、万葉仮名による表記

前述のように、漢字を取り入れて我が国なりの文（漢式和文体）を書けるようになったのが大化の改新以降であり、奈良時代（710～793）になると古事記を始め、各国の風土記、日本書紀などが次々に編纂されていった。万葉仮名で知られる万葉集も759年に編集されていることから、万葉仮名も用いられていたことがわかる。

ここで認識しておかなくてはならないのは、万葉仮名は表音文字、漢式文体の文字は表意文字であることである。すなわち、万葉仮名はやまと言葉として一文字ごとに記していくことにより、すらすらと読んで初めて意味がわかる。これに比べて漢式和文体は、一文字一文字の読みは音読みになるので、読みを聞いたのでは理解できず、その一文字の表意により、何を述べているか理解できるというものである。従って、漢字の音読みとやまと言葉の意味の一致（いわゆる翻訳）をみることができた言葉も多かったであろうことは推測できる。

### ④、呼び方と意味について考える

以上のような時代背景を認識した上で、オオサンショウウオを現していると思われる部分のみをみよう。その最も古いものが、②と③の「椒魚」である。

これは⑤以降の書籍でもわかるが、中国から伝わった言葉ではない。伝来したオオサンショウウオらしきものを示す言葉は、鰻鱺魚、鱈、鯢魚なのである。すなわち椒魚は和製の言葉のようである。⑤や⑥でも示されるが、オオサンショウウオらしきものを示す中国伝来の漢字に対して、和名を波之加美以乎（ハシカミイオ）と示しているように、オオサンショウウオらしきものを示す、やまと言葉は、「はしかみいお」なのである。波之加美以乎は、時代からして万葉仮名であり、漢字そのものに意味はない。日本人が文字を持たない

時から、オオサンショウウオらしきものごとを、「はしかみいお」と呼んでいた可能性がある。

「いお」は魚のことを言っているが、「はしかみ」は何であろうか（なお、日本語は二音節以上の言葉は濁音に変化していく。「はしかみ」は、いつしか「はじかみ」になっていく）。小学館の「日本国語大辞典」を見ると、「はじかみ」の項で、(1)植物・山椒の古名、(2)植物・生薑の古名とあり、(1)の語源説として、①ハジケマの転ー花がハジケて実が出る(大言海)、②ハジカミラの略、ハジは同前、カミラは菰の古名(箋注和名抄)、③辛くて歯がシカムところから(雅言考)とある。

山椒が日本古来のものであること、生姜は中国から伝来したことを考慮すると、太古から居るオオサンショウウオらしきものに対して、何らかの理由で山椒すなわち「ハシカミ」の名がついたことは推測できる。しかし、⑨で示しているように、江戸初期には、いつしか「山椒魚」と呼ばれるようになり、その理由も、山椒の肌に似ているから、山椒の臭いがするからなどと、何故かもっともらしくうまく納まっているように思える。

後の時代にどのように呼ばれようと、記録に残る奈良時代には、椒魚すなわち、波之加美以乎(ハシカミイオ)と呼ばれていたのであり、山椒と何らかの係わりがあったことが推測される。(参考図書:「かな」小松茂美 岩波新書、「日本語の歴史」山口仲美 同 他)



## 平成 20 年度 日本ハンザキ研究所のイベント報告 その2

事務局員 黒田 哲郎

前回の「あんこう」にて、10、11月に計3回のトレッキングを行う予定であるとお伝えしましたが、最終的には10、11月に一回ずつの計2回が実施されました。その様子についてお知らせしたいと思います。

### 第2回秋のトレッキング(平成20年10月

12日)

初めてのトレッキングとして準備を進め、当日は11名(うち小学生3名、女性が8名)の参加がありました。このときには、新緑のトレッキングにて歩く予定であった黒川本村～直谷の頭(なおだにのかしら)～直谷林道入り口をたどるコースを歩きました。

前半にはきつい上り坂があり、何度となく挫けそうになりましたが、所々に見える雄大な眺めに励まされながら、何とか登り切ることが出来ました。コースの中間にある直谷の頭では、黒川ダムや大明寺、黒川温泉といった見慣れた施設を意外な角度から見られることに感動しました。黒川にお住まいの人でもほとんど見たことがないこの景色は“たからもの”。是非、雪の黒川を眺める雪山トレッキングを、との思いを巡らせています。

歩いた距離は、正確には分かりませんが地図上では約6kmといったところですが、上り下りもあるので、実際には7～8kmあるかもしれません。このトレッキングでは、最後まで歩いたり走ったりしながら喋って歌う子供たちの元気さに驚かされました。



写真 下りのはのんびりと景色を楽しみながら

### 第3回秋のトレッキング(平成20年11月15日)

当日は11名(子供の参加なし、女性が5名)の参加がありました。このときには、旧黒川小中学校の遠足の定番、三国岳へと登りました。その名の通り、但馬・丹波・播磨の三つの国を分ける頂です。ここは播磨側の多可町

から登るコースが一般的です。また、黒川から登る場合、普通は長野集落から登ることが多いのですが、ここでは但馬と丹波の境の尾根を登るコースを選びました。大外～三国岳～三国峠～長野をたどるこのコースは、例年ですと道が笹に覆われて見えなくなるほどですが、今年度は、その姿が全く見えず、また丹波側のほとんどが広葉樹だったので、落ち葉を踏みしめながら日差しの差し込む比較的明るい林内の散策を楽しむことが出来ました。

ただ、今回のルートも頂上手前に急な登りがありました。直前に戴いたおやつのおかげで何とか踏ん張り、坂を登り切ったところが頂上でした。直前まで気配がないにも関わらず、突然頂上が現れたので、驚くとともにたまった疲れもどこへやら。

頂上は南から南東方向に開けており、丹波市の中心、氷上町付近がよく見渡せました。ひとしきり眺めを楽しんだ後は、ゆったりと山頂でお昼ご飯をいただき、山を下りました。こちらのコースも前述のコースと同程度の距離だと思います。



写真 秋晴れの山頂でお昼ごはん

一つ残念なことに、どちらのコースにおいても、人通りがほとんどない山道にもかかわらず、ゴミが見受けられました。特に車が通ることの出来る林道では、ゴミが多くなる傾向にありました。そこで、山を下るときには手持ちのビニール袋に拾って集めました。終点に着くまでにいっぱいになってしまい、改めてその多さを実感しました。

ただ、それらのゴミは20年以上前のパッケージのものも多く、これは樹木伐採のために林道を取り付けて以来、森林の維持管理がほとんどなされず、更に地元住民や、登山客等の入山が少ないことを示しているのではないかと思います。

目の前に来たものは何でも呑み込んでしまうオオサンショウウオ。ゴミを誤飲してもらっては困ります。また、せつかく住むならきれいな川がいいですね。今後、トレッキングの帰り道では清掃活動を行い、多少なりとも市川流域の美化に協力できないかと思案しております。

ただ、子供の頃に見たことのある、お菓子やジュース、ビールのパッケージ・缶を久しぶりに見て、変なところで懐かしさを感じ、妙にセンチメンタルな気分を味わう羽目になりました…。

両イベントについては、当研究所 HP のブログに詳細記事があります。

### トレッキングの問題点

今年度のトレッキングにおいては、集合場所を黒川自然公園センターとし、第2回ではそこを出発し、別の地点が終点になりました。第3回では出発地点が集合地点と異なり、更に終点はどちらでもない別の箇所となりました。

どちらの回も参加人数が少なかったことが幸いし、スタッフの車をやりくりして、何とか送迎することが出来ました。これ以上参加者が増えた場合、参加者の車を出して送迎に加わってもらわなければ、現時点では対応することが出来ないことが分かりました。この問題点をいかに克服するかが、今後参加者を増やしてゆく際のポイントです。もちろん、起終点を同じにし、行きと帰りが同じでも、飽きない工夫をすることで、この問題を回避することも可能です。みんなの知恵を絞り、各方面に協力を仰ぎながら、乗り切りたいと思います。

また、次年度からは登山だけでなく、鳥類、および花・樹木に詳しい方をお招きし、それらを楽しみながら学べるコースを設ける予定

です。初回は5月に行いますので、詳細が決まりましたら、皆様にお伝えいたします。

今後もオオサンショウウオやそれを取り巻く自然環境等について一緒に学び、またそれを育む源流の里である黒川の自然に親しむことが出来る楽しいイベントを企画してゆきます。是非多くの方の参加をお待ちしております。

上記のトレッキングの際には、ここ黒川に山小屋を持ち、活動されている旧姫路工業大学(現兵庫県立大学)ワンダーフォーゲル部のOBである岡村さん、吉田さんにガイドをしていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。



### 編集後記

創刊号からもう半年が過ぎました。ここに第2号を皆様にお届けします。

思えば、平成20年度はNPO設立やイベントの試行など、本当に公私共に忙しい年となりました。黒川地域、生野の町、但馬全域における活動に加えて、日本ハンザキ研究所の活動が、私の目指す地域貢献への道をさらに大きく開いてくれたと実感しています。

地域の活動と日本ハンザキ研究所の活動とが結びつくことで、新しい可能性が生まれてきつつあるように思えます。新年度には新たに、いろいろなイベントを計画していますが、このまま良い方向に進むことを願ってやみません。今後も、会員の皆様をはじめ多くの方々の参加をお待ちしています。

なお、私達の法人の主旨に合えば、内容は問いませんので、この会誌への自由な投稿をお待ちしています。

理事(編集長) 竹村真澄

発行 2009年3月31日

特定非営利活動法人

**日本ハンザキ研究所**

兵庫県朝来市生野町黒川 292

電話/FAX: 079-679-2939

e-mail: info@hanzaki.net

HP URL: <http://www.hanzaki.net>

